

《隱岐一宮》

由良比女神社 と日吉神社



由良比女神社社務所

〒684-0211 島根県隠岐郡西ノ島町浦郷

電話 (08514) 6-0950



十方拝礼

角笠、スッテンは鳥かぶと、楽器はべんざら小ざさらはささらで、スッテンは鼓を持ちます。

初めに二人踊りとして静かな中門口、威勢のよいスッテン、可愛らしい小ざさらの踊りです。全員で総踊りをします。踊りは十二に分かれています。歌詞はなく、

「ターレしゅうや、しゅうはいら、サアしゅうはい、太郎らがしゅうはいら」を囃し手が繰り返し、スッテンが「ソーイソイソイ」と掛声です。

静と動、緩と急、単調と変化にとみ、右左、前、後、丸く展開し踊りと踊りの移行は巧みで扇の手は綺麗です。

前半は単調で飽きられやすく、後半は変化にとみ、都の香り、平安の昔を偲ばせ九百年の年輪を感じます。総時間五十分ほどです。

前夜祭の午後、総練習をします。これを笠揃えといいます。袴姿の庭の舞の舞人が威儀正して観覧します。

浦郷は昔は島内一の貧乏村でしたのに二百年以上の御旅の祭り、九百年の日吉神社の諸神事を伝えていることは不思議でもあり、また素晴らしいことと思います。

由良比女神社

祭神 須勢利姫命

(土地では由良比女神)

例祭 七月二十八日

特殊祭 神帰祭(かみがえりさい)

十一月二十九日

◆由緒

当社は仁明天皇承和九年(八四二年)官社に預り承和十五年、清和天皇貞観八年、陽成天皇元慶元年に朝廷より鄭重な祈禱ありと六国史に見え、醍醐天皇の延喜式(九〇五年)に名神大・元名和多須神とあり、袖中抄、土佐日記に「ちぶり神」とあります。

海上安全守護の神として遣唐使や使節を遣す時、新羅の賊兵の侵入を防ぐなど大陸交通の要点としての隠岐の国の諸神とともに朝廷に尊崇せられ、一般世人にも信仰されたと思われま。

平安朝末期に隠岐国の一宮と定められましたが、以後徳川時代の中頃まで衰微してました。

寛文七年(一六六七)松江藩士斉藤豊仙

の隠州視聴合記に「由良明神と号する小社あり極めて小さく古りはてて亡きが如し」とあり、元禄九年(一六九六年)一国一宮に詣でし橘三喜、都々美一光もその衰微を慨き神光あらわれることを願ひ、都々美一光は、

おきつ風吹きつたへなむ由良姫の

御籬によする浪のしらゆふ

と詠つて去りました。慶長十二年、元禄五年に本社建立をしていることは里人もかなり努力したと思われまが、衰微の原因として武士の時代になると遠流の地隠岐の国は、覇権を奪るには不要な土地であり、造船、航海術の進歩は九州拠点となり、隠岐の神々の加護を必要としませんでした。また、田畑の少ない浦郷では、天災による影響も大きかったことが神社衰微の原因と推測されます。

安永二年(一七七三年)島前三ヶ村の庄屋が集まり、御旅祭の再興を相談していることは島前に於ける当社の位置を示しています。

明治五年郷社に列し、二十二年精巧な本殿を改築し、昭和六年拝殿改築、境内地を整備して神域を整い、昭和五十年島根県特別神社に指定されました。

◆例祭

当社の例祭は大祭り、小祭りを交互に行います。小祭りは祭典だけ、大祭りは神輿の海上渡御即ち御旅祭をします。

御旅祭は往古より行われ、余り盛大だったために中断していたのを慨いて安永二年(一七七三年)に島前の庄屋が集まり再興をさめ、島前より青銅三貫文、浦郷村より三貫文を祭礼料として拠出し、島前一統の祭礼と相極申候とあります。

七月二十八日午後七時神輿出御、境内で威勢よく練り歩き、午後八時半神船(みふね)に乗船、供奉船を従いて海上巡幸一時間、九時半海岸広場に接岸、漁村特有の威勢よさ、チョウウサ、チョウウヤツサの掛声、押し合い、へし合いの暴れ神輿、荒れ神輿で見物人の肝を冷すこと再三、十一時過ぎ宮司宅の飯宮に入御、神船は昔は和船三隻を組み合せ女人禁制、今は近代装備の百、余の鮮魚運搬船三隻を杉丸太で嚴重にからみます。婦女子も乗せ、観光客の乗船を歓迎するの時代流れでしょうか。

翌二十九日はこの逆コースで還幸します。山陰最大の船祭りです。

◆神帰祭(かみがえりさい)

十月は神無月ですが、出雲国は神在月で八百万の神が集まり諸事を相談されますが、当社の祭神もこれに出席され十一月二十九日に帰られます。この時は多少にかかわらずいかが寄ると伝えられていて、戦後でも再三のことがありました。土地の人は「いかが寄せ祭り」といいます。昔は御座入祭(こざいりまつり)ともいいました。

◆伝説と「いかに寄せ」のい

神武天皇の時、由良の浜の畳石にいかを手に持って祭神が現われたとのこと。
また祭神が芋桶に乗り渡海される時、御手を海にひたしたところいかがが嘔みついたその非礼を詫びていかがが毎年寄るようになったとのこと。

知夫里島の伝説に由良比女神社はもと知夫利島のいかに浜にあったのを浦郷に遷されたから、いかがが寄らなくなったとのこと。

いかは十一月末より二月初めまで寄りま

す。
戦前は由良の浜いっぱいにはずらりといかが拾い小屋が並んでいました。

いかが寄る時は夜で「シユツ、シユツ」

いかに寄せの浜





28日夜の神船



神興昇ぎ

と音を立てザワザワと波しぶき上げて押し寄せて来ます。小屋に息をこらして待っていた里人は遠浅の海にとび出して、籠や手づかみで拾います。拾った人の占有物で、戦前は田畑を買った人、戦後は小舟いっぱい拾って転職した警官、歳末警戒の帰途警察署長以下全員が拾って大晦日に故郷に箱いっぱい持ち帰った署員など、いか拾いのエピソードは沢山あります。

◆ いかはなぜ寄らないか

いかは回遊性で沿海州・朝鮮半島・対島より北上して隠岐島に来るといわれています。

戦後は漁船の大型化・近代化で百ト以上のいか釣り船が沖合漁業として日本海の真中に多数出漁し、一隻数十万の電力照明（漁火）多数の機械釣りによる漁獲は本土沿岸へのいかの回遊を妨げている大きな原因と考えます。

よしんば沿岸に回遊しても近代的な小型漁船で、浦郷湾や由良の浜に回遊しないと

思います。
大正末期に浦郷湾に設置の大敷網が敷かれ、戦後は築港・護岸・養殖事業による由良湾の狭少、汚染、漁船の昼夜を分たぬ航

行、多数漁船の繋留など漁業施設、漁法、漁船の近代化がいか寄せに影響があるとも考えられます。

大正初期に連日連夜いかが寄り、「今夜も今夜も」と婦女子が見物に行つたと古老は話します。

全く夢のような話ですが近代化の現在、いかの寄ることは益々困難になると思います。



日吉神社

祭神 大山咋命
例祭 旧九月九日

◆ 由緒

当社はもと近江国滋賀郡真野庄（現大津市真野町）に祀られていたのを後白河法皇の時代に領主真野宗源が祝部吉田氏とともに兵乱を避けて氏神の山王権現、八王子社を奉じて九百年前に浦郷に移り、現社地に奉遷したと伝えられています。当社には隔年ごとに行われる神事として、庭の舞・神の相撲、十方拝礼（しゅうはいら）があります。十方拝礼は田楽のことです。

昔は神楽・大般若経の転説とともに五本の祭りといわれていました。

明治の神仏分離により山王権現を日吉神社と改称、大般若経の転説は廃され神楽もいつしか止まりました。

祭日の旧九月九日は節句で里人の休日に合せたもので、神輿昇ぎの多い島前地区で近江伝来の九百年の舞楽を伝えることが当社の特色です。



庭の舞（平成4年3月、重要無形文化財指定）



神の相撲

庭の舞は「東遊び」の地方化したものと考えられ、格式・斉戒を重んじ厳かな舞であります。

三名ずつ相対して着座し、右頭より立ちて無言で舞い、所作をしてつづいて左頭と交互に舞い、終わってから六人全員で唱え辞をしながら舞います。

終わると「この宮の五本の祭をする人は命も永く千代の世までもサンヨ、サンヨ」と唱えて着座します。

前夜祭は紋付、袴、扇子で深更まで舞い、翌早朝潮ごりを取ります。例祭は侍烏帽子に浄衣、扇子で一回舞います。

神の相撲は紅白のまわし姿の少年二名が神前中央で低頭拝礼の所作を終わるとホーハンヤと叫び、かけ足で社殿を半周し神前に還ります。三回この所作をします。一勝一敗一分になるように指導され、故実伝来は不明、吉区を占う所作とも考えられます。

十方拝礼は昭和の初めまでは壮年、昭和三十年まで青年、現在は小中学生が踊ります。踊り手は中門口二名、中踊り四名、スツテン二名、小ざさら脇二名、小ざさら二名、胴打ち二名、笛吹き四名の編成です。

中門口は白丁、他は筒袖上衣、くくり袴、脚絆、草鞋、脚絆、脇差、冠り物は四